

## アメリカの仏教について

ロバート・F・ローズ

### はじめに

ご紹介いただきましたロバート・ローズです。同じ京都の大谷大学で仏教を学んでいます。今日は皆さんにお話できることを楽しみにしてまいりました。私はアメリカ人ですから、今日はアメリカの仏教を中心に話をしていきたいと思っています。

アメリカの仏教は現在、大きな転換期を迎えています。この点について、今日お話しするわけですが、それに入る前に、まず最初にアメリカの仏教を研究している学者がこの三、四年でたいへん増えたことにも注意しておかなければなりません。つまり、

アメリカ仏教はアメリカの宗教史の中で一つの大きな研究分野として確立されつつあります。皆様にお配りしたレジメに参考文献として英文の本をいくつか出しておきましたが、それらの本はアメリカ仏教研究の基礎付けをしているものです。アメリカ仏教研究の現状に関心がある方は、ぜひこれらの本を読んでください。私の話もこれらの本に依っています。（注：これらの本は最後に参考文献として挙げておきます。）

レジメには今日のテーマとして二点を挙げておきました。第一は「仏教はアメリカの宗教である」ということ、そして第二は「アメリカ仏教はアメリカ人の潜在的な宗教観に応じて変化している」というものです。そこでまず第一からお話を進めますが、アメリカの仏教は、ほんの一〇年ほど前までは基本的にはアジアからの移民の宗教と考えられてきました。皆さんご存じのように、アメリカは移民の国です。世界中からいろんな人々がやってきてつくられている国です。もともとアメリカ大陸に住んでいた先住民の人たちを虐殺して国がつくられたという悲劇的な面もありますが、基本的には世界中から移民してきた人たちがつくった国です。

先程申しましたように、長いあいだ仏教はアジアからきた移民の宗教として位置付

## アメリカの仏教について

けられてきました。それとは別に白人の中にも仏教に関心を持ち、仏教に帰依した人々が何人かはいましたが、それは一風変わった人たち、アメリカの中心の文化から逸脱した人たちと思われてきました。仏教といえばアジアからの移民の宗教、ごく少数の人たちが信仰している宗教と見られてきたわけです。しかしこの一〇年間でそのような状況は変わりました。移民の人たちが一世から二世になり、やがて三世、四世、五世にまでなってきた、移民であるという意識がなくなってきました。それにつれて、仏教もアメリカ人の宗教になってしまったのです。私の妹が日系の四世の人と結婚していますが、その子どもたちは五世になります。よく移民の研究をしている学者が言うことなんですけれども、三世になると祖父の国の国語を話せなくなり、完全にアメリカ人になりきってしまうのです。私はハワイ大学で四年間すごしましたが、日系三世・四世の知人がたくさんいました。そしてハワイの日系の人たちに「日本とアメリカが戦争になったら大変なことだね。そうならない方がいいな」と言いますと、キョトンとするんです。「俺たちはアメリカ人だから、日本と戦争になっても悲しいことがない」という態度です。つまり、みんな完全にアメリカ人だという意識なんで

す。そういう意味で、仏教は、最初は移民の宗教だったんですが、移民の人々がアメリカ化するにつれて、仏教もアメリカの宗教になってきていると言うことができるんです。

もう一つのポイントは「アメリカの仏教はアメリカ人の宗教観にに応じて変化している」ということです。仏教はインドで始まりましたが、やがて中国に伝わり、日本に伝わり、今や世界中に伝わっています。インドで生まれた仏教が中国に伝わった時、仏教の本質を変えることなく中国の人々の宗教観や世界観、宇宙観に応じて、インドとは違った中国独自の仏教が生まれました。日本でも同様です。大陸や朝鮮半島から仏教を採り入れたわけですが、中国仏教・大陸の仏教がそのまま受け入れられたのではなく、日本人の考え方に応じて日本独自の仏教が作りあげられたのです。そして西欧に仏教が伝わった時、同じことが起こるわけです。現在アメリカではアメリカ人の宗教観や価値観にマッチしたアメリカ仏教がつくられつつあります。今日はこの二つの点を具体的にお話していきたいと思います。

## アメリカの仏教について

### アメリカの宗教

初めに、皆さんはアメリカがキリスト教大国であることを知っていますか。そもそも皆さんの持っているアメリカという国のイメージはどんなものですか。アメリカは個人主義の国で、何をやっても自由だと思っているかもしれません。あるいはアメリカの人たちは物質主義者で、金持ちになるのが人生の一番の目標であり、金持ちになって幸福になるためにはどんな手段でも使うというイメージをもっている人も多いと思います。しかしアメリカは、宗教―具体的にはキリスト教―を大切にしている国だという側面もあります。

皆さんは世界のなかで典型的なキリスト教の国はどこかと質問されたら、どの国を思い浮かべますか。イタリアですかドイツですか。おそらくアメリカは頭に浮かばないと思います。しかし、アメリカにはゴスペル音楽、黒人霊歌の伝統などがあって、キリスト教が大切にされている国です。この点をよく示している資料があります。一

九七九年に「Is religion important to you?」（皆さんにとって宗教は大切ですか）」という質問を含んだアンケートがアメリカとヨーロッパで行われました。この質問にたいしてアメリカでは「宗教が非常に大切だ」と答えた人が五八%もいました。約三分の二の人です。「かなり大切だ」と答えた人を含めると八八%になります。つまり、アメリカの九割近くの人が宗教は生きる上で大切なものだと言っていることになります。これはびっくりする数字ですね。アメリカというのは非常に宗教を大切にしている国です。たぶん皆さんのイメージとは違うと思います。ヨーロッパの諸国と比較してみますと、イタリアで「宗教は非常に大切だ」と答えた人が三六%で約三分の一です。イタリアはカトリックの国です。イタリアの首都ローマにはバチカンという、ローマ法王の直轄の独立国家があります。そのイタリアにおいて三分の一の人しか宗教が大切だと思っていないのです。もっと高くていいと思うのですが、そうではありません。英国では「宗教は非常に大切だ」と答えた人は二三%です。フランスもカトリック勢力の強い国ですが、二二%です。ドイツはルターの宗教改革の舞台となった国ですが、アンケートによると「宗教が非常に大切と思う」のは二割を切る一七%の

## アメリカの仏教について

人だけです。北欧でも一七%で、逆に「宗教は重要ではない、私の人生と全く関係ない」と答えた人が半数以上の五二%を占めています。そういう意味で世界的なところというと、アメリカはキリスト教王国で、それだけ宗教が大切にされていることになります。この数字は一九七九年のアンケートですから、もう二〇年以上たっていますので、ちよつと古いものです。ヨーロッパの宗教事情もずいぶん変化していると思います。変わっていないのはアメリカの宗教に対する関心です。アメリカでは今日でも、アンケートの取られた当時と同じように宗教が大切なものとされていると思います。

このようにアメリカでは宗教がかなり重視されています。アメリカで宗教といえばキリスト教のことであつたんですが、最近アメリカの宗教事情はずいぶん変わってきています。たとえば六〇年代にアメリカの移民法が改正され、それ以前にはあまり来なかつた地域の人々を積極的に移民として受け入れるようになりました。そしてその結果、中近東やパキスタン、東南アジアから多くのイスラム教徒がアメリカにきて、今やアメリカにはイスラム教徒が多く住んでいます。そして先ほども言いましたように、イスラム圏から移民してきた人々が二世、三世になるにつれて、イスラムは単なる移

民の宗教ではなくなり、一つの確固たるアメリカの宗教として市民権を得てきているわけです。

## アメリカの仏教

仏教についても同じようなことが言えると思います。今、仏教はアメリカでどんどんと広がっています。はつきりとした数字は分らないですが、人によつてはアメリカには一〇〇万人の仏教徒がいるとか、六〇〇万人の仏教徒がいると言っています。アメリカの仏教徒の人数の数え方にも問題がありますが、「night stand Buddhist」と言われる仏教徒がアメリカにはかなり多くいると思われます。アメリカの家にはベッドの横に小さなテーブルがあつて、その上にランプがあります。そのランプをナイト・スタンド (night stand) と言いますが、night stand Buddhist とは一日の仕事を終えて家に帰ってきて、寝る前にベッドにもぐり込んで仏教の本を読んだりする人々のことです。あるいは寝る前に座禅を組んだり、チベット仏教の瞑想をしたり、念仏や題



## アメリカの仏教について

目を唱えたりする人もいます。つまり *right stand Buddhist* とは正式には仏教団体に所属しないが、自分たちを「仏教徒」と呼ぶ人たちのことです。このような仏教徒はアメリカにかなりいます。こういう人たちを含めると六〇〇万人という数字が出てくるのです。

仏教の広がりを見わす、もう一つの資料があります。それはドン・モレアル (Don Moreale) という人が一九七九年に出版した『アメリカ仏教完全ガイド』(Complete Guide to Buddhist America) のなかに見られるものですが、この本を書くにあたり、著者は当時存在していた仏教のメデイーション・センター(瞑想センター)や禅センターを徹底的に調査しました。その結果、次のような統計が得られました。一九〇〇～一九六四年のあいだ、つまり二〇世紀の最初の六四年間で、アメリカには二〇位のお寺しかありませんでした。それが六四から七五年のあいだに五倍に膨れ上がりました。この時代は禅ブームが起こり、第一次仏教成長時期にあたります。そして次の一〇年にまた倍になって、次の一〇年にはさらにまた倍になりました。このように一〇年ごとに仏教のお寺や禅センターは倍増し、アメリカの仏教は確実に広がってい

ったと言えると思います。七九年、彼が調査した時はお寺が一〇〇〇ヶ所位あったのが、今は一五〇〇位いあると考えられています。

アメリカ仏教は大きくいって、「移民仏教」と「白人仏教」に分けることができます。「移民仏教」や「白人仏教」は、必ずしも適切な表現ではないと思いますし、レジメに挙げた参考文献のなかでもこの二つのグループをどう呼ぶか、適切な表現は何かを、いろいろと論議しています。しかし今は理解しやすい言葉として「移民仏教」と「白人仏教」を使うことにします。さて移民仏教はアジアから移民してきた人たちに伴ってきた仏教です。それぞれ移民のグループがあり、違った形の仏教をアメリカにもたらしました。日系の移民グループでは浄土宗や浄土真宗、禅宗があり、創価学会も勢力を持っています。因みにアメリカに最初にやってきた仏教の開教師は西本願寺の人たちでした。一八九八年に二人の僧侶が西本願寺からアメリカに派遣されてお寺を建てています。他にアジアからやってきた仏教の代表的なものは中国仏教、チベット仏教、ベトナム仏教、韓国仏教などがあります。さらに南アジアからはスリランカ、タイ、ビルマからの移民に伴って仏教の僧侶がたくさんアメリカにきて、活躍し

## アメリカの仏教について

ています。

もう一つの流れは白人仏教です。仏教に関心を持つ白人は現在たくさんいます。多くはアメリカの支配的な宗教、つまりキリスト教やユダヤ教に疑いや拒絶感を持ち仏教に関心を持つようになった人々です。日本だったら逆ですね。仏教が既成宗教ですから、それに反発を持ったらキリスト教に改宗します。アメリカでは既成宗教はキリスト教ですから、それに反発して仏教に関心を持つ人が多いわけです。

仏教への関心は、白人の間では一九世紀のはじめに遡りますので、長い歴史を持っています。その中で特に注目すべきものは、超絶主義（Transcendentalism）という文学運動です。これは、一八三〇～四〇年代に、ニューイングランド地方、つまりアメリカの東海岸のボストンのあたりを中心にした運動です。アメリカの個人主義の源と考えられている要素もあり、アメリカ文学史の中で重要な運動であります。その代表的な作家のなかにはR・W・エマソン（一八〇三～八二）やH・D・ソロー（一八一七～六二）などがいますが、こういう人たちは東洋に深い関心を持ち、ヒンズウ教や仏教について学びました。このあたりから仏教が少しずつアメリカの白人の間で

知られるようになりました。

もう一つ大きな出来事は、一八九三年にシカゴで開催された世界宗教者会議（World's Parliament of Religion）です。この宗教者会議はその年にシカゴで開催された万博の一環として開かれたものですが、キリスト教の人たちだけでなく、それまでアメリカとあまり縁のなかった世界の地域からも多くの宗教者が参加しました。イスラムの代表も、ヒンズウ教の代表、神道の人、そして仏教を代表する人々も参加しました。これがきっかけでアメリカの宗教者の間でキリスト教以外の宗教に目を向けるような人々が現われ、アメリカの宗教史の中で重要な役割を果たしました。これがアメリカで仏教が広まるもう一つの大きなきっかけになりました。特に注目したいのは日本から禅宗の僧侶、釈宗演という人が参加していることです。釈宗演はシカゴで要請を受けて、日本に帰った後、彼のもとで座禅をしていた鈴木大拙という哲学者をアメリカに派遣します。大拙はアメリカに一〇年間いて、日本に帰ってから学習院の英語の先生になるのですが、後に京都に移って大谷大学の宗教学の先生になります。その頃から大拙は英語で禅や大乘仏教についての本をたくさん書くようになりますが、

## アメリカの仏教について

それが欧米の人たちに日本の禪に関心を持たせるきっかけになります。一九五〇年代になると、大拙はニューヨークのコロンビア大学の客員教授として招聘され四年間過ごしますが、コロンビア大学の学生やニューヨークの知識人相手に仏教について講義し、大きな影響を与えました。そして同じころ、ジャック・ケラワック (Jack Kerouac)、アレン・ギンズバーク (Alan Ginsberg)、ゲアリー・スナイダー (Gary Snyder) という人たちによって、仏教（特に禪）に影響された文学運動も起ります。こういう形で五〇年代から六〇年代にかけて、仏教はアメリカに浸透していききました。先ほど一九六四年―一九七五年の間にアメリカのお寺や禪センターの数が五倍に増えたといいましたが、この火付け役が大拙だったのです。この時代到大拙がニューヨークに行き、仏教を広めて、それを受けて小説に取り組む作家たちが増えてきて、仏教がどんどん広まり、現在に至っているという状況です。

## アメリカ仏教の特徴

以上のように仏教は一九世紀の初めからアメリカで広まった訳なんです、現在のアメリカの仏教の特徴とはどんなものでしょう。それには五つほどあります。

まず第一に「民主主義」です。日本の仏教を例にとると、師弟関係、先生とお弟子さんの関係は厳格なものがあります。アメリカでも先生と弟子の関係は大切ですが、日本ほど厳格ではなく、先生であっても間違っている時は批判するという西洋の批判精神が重視されています。いくつかのアメリカの教団では教団の理事会がありますが、禅堂の老師を理事会が決定して任命することもあります。日本だったら、お寺の住職を実際に門徒さんたちが集まって任命することはまずありえないと思います。

二番目は「在家主義」です。日本の仏教では在家主義が浸透していますから何とも思いませんが、アジアの仏教全体を見渡すと、在家主義はあまり顕著ではありません。お坊さんといえど頭を剃って法衣を着て、結婚しないで世俗とは切り離された僧院の

## アメリカの仏教について

中で生活します。僧侶が結婚して、代々お寺を世襲していくのは日本独自の形態です。アジアの仏教から見ると特異な形態です。しかしアメリカの仏教はそういうアジアの僧院主義の仏教は選びませんでした。もちろん厳しい僧院生活をしている団体もあります。たとえばニューヨーク郊外にキャッツスキルという山がありますが、そこでは大菩薩禪堂という、禪宗の立派なお堂を建て厳しい禪の生活をしている人たちがいます。しかし一般的にアメリカの仏教教団は在家の人たちが中心で、その教団に属する人々は結婚して子どもを設けて、普通の社会生活を営みながら、仕事が終わった時や週末に瞑想センターや禪センターに行って座禪を組んだりします。日常生活の中で座禪やチベット仏教の瞑想を行います。仏教の行を日常生活に取り入れて仏教者として生きていくという考え方が主流になっています。

アメリカ仏教の三番目の特徴として、「男女平等主義」（性差別をしない仏教）を挙げることができます。これは皆さんにとっては励みになると思いますが、アメリカ仏教では僧侶と尼僧の区別はありません。平等な関係で教団が形成されています。そして、女性のリーダーがアメリカ仏教にはたくさんいるんです。禪宗の老師の

地位についたり、一つの教団のリーダーになったりする女性は多くいます。仏教のリーダーシップが日本のように男性に限られ、女性は住職として好まれないという状況は全くありません。さすがアメリカの仏教だなと思います。

もう一つの特徴としてエンゲージド・ブディズム（Engaged Buddhism）があります。これはアメリカの仏教の最も大きな特徴だと思います。Engaged Buddhismは最近、日本でもよく聞かれる言葉になってきましたが、これをどう訳していいのかわかりません。あえて意味をとって「社会問題に取り組む仏教」と定義しておきます。これは釈尊の教えに基づいて社会にみられるさまざまな問題を考えていこうとする仏教のことです。社会問題に積極的にかかわっていくことによって、自分の宗教性を深めていこうとする仏教といってもいいと思います。それは「仏教のアメリカ化」の大きな特徴の一つだと思います。アメリカの精神風土の基礎を形成するキリスト教ではボランティア活動が大切です。キリスト教の人たちはいつもボランティア活動をしたり、社会福祉運動、政治運動やエコロジーの運動に参加しています。キリスト教では、本当の信仰は社会活動に現れ出るものだと考えられています。その考え方はアメリカ



## アメリカの仏教について

カの仏教者の中にも深く浸透していて、ほとんどのアメリカの仏教徒は「仏教も社会的に貢献していかなければいけない」という信念を持っています。

そしてまず Engaged Buddhism という、ティク・ナットハン（Thich Nhat Hanh）の名を思い浮かべます。この人の作品はたくさんありますが、日本語にも何冊かの翻訳があります。一回読んでみてください。ティク・ナットハンにはベトナムのお坊さんです。皆さんは若いからベトナム戦争を知らないでしょうね。私が大学生の頃は一番激しい時期で、私もアメリカ人ですから戦争があると徴兵される可能性がありました。幸いに徴兵されませんでした。私の友だちの中にもベトナムに兵隊として送られた人がいます。そういう中でベトナムの仏教者たちは戦争に反対しました。戦争という状況を何とかしなければならぬとして、中立の立場で戦争に反対したり、戦争の犠牲になった人たちを助ける活動が行われました。時には僧侶がガソリンを被って自ら火をつけて、焼身供養をすることによって戦争に抗議したこともありました。そんな中でティク・ナットハンは、社会問題に積極的に取り組む仏教として「Engaged Buddhism」を提唱し、今や世界中の仏教の人たちに強い影響を与えてい

ます。

ティク・ナットハンに触発されてつくられた団体のなかには「Buddhist Peace Fellowship」（仏教平和同盟）があります。ハワイのロバート・アイトキン（Robert Aiken）老師、詩人のゲアリー・スナイダーやジョアンナ・メーシー（Joanna Macy）という人たちがつくったものです。大きな団体で、全世界で四〇〇〇人の会員がいます。この団体は人権問題や環境問題に取り組んでいます。一例を挙げますと、ビルマの政治家・活動家のアウン・サン・スーチーさんは長い間監禁されていたのですが、その人の釈放を求める運動を展開しました。

そして私が特に面白いと思うのはバーナード・グラスマン（Bernard Glassman）という人です。この人の団体は「Zen Peacemaker Order」といいますが、これは「平和をもたらすための禅の運動」とでも訳すことができると思います。グラスマン老師はもととは飛行機を設計するエンジニアでした。ロサンゼルスまえすみの禅センターに前角老師という人がいたのですが、その老師のもとで禅を学んで、一人前になった時にニューヨークで活動を始めました。最初グラスマンは普通の禅の教化を行っていたんで

## アメリカの仏教について

すが、ニューヨークにはたくさんの方ホームレスの人々がいることに気づき、彼らに食事を与えたり、寝るところを与える施設をつくるようになりました。そしてさらに、ホームレスの人たちが毎日味わっている苦しみを理解するためにニューヨークのスラムに行って、スラムで座禅を組んだりしました。騒然たる状況の中で座禅を組むことによって苦を理解する運動を行いました。また人間の死の苦しみを理解し、慈悲の心を養おうとアウシュヴィッツで座禅の会を開いたりもしました。ナチス・ドイツの時代、ユダヤ人を強制収容所に入れてたくさんの方ユダヤ人を殺しましたが、アウシュヴィッツは一番有名な強制収容所で世界遺産になって残っています。そこに行って座禅を組む。人々の苦しみを理解して、それを通して自分も精神的に成長し、宗教者として成長していくプログラムを組むといった、面白い試みをしている人です。アメリカの仏教は「社会問題とは関係なしには本当の仏教にはならない」という信念を持って展開されているわけです。

最後の特徴として「宗教間対話」(religious dialogue)が重視されている点について簡単に述べておきたいと思います。アジアでは仏教のグループが互いに話し合うこと

はあまりしません。日本でも、浄土宗の人たちが浄土真宗の人たちと話し合うこともあまりありません。浄土真宗でも東と西の人が話をする機会もあまりありません。まして浄土系の僧侶が日蓮系の僧侶や禅宗系の僧侶と一ヶ所に集まってざつくばらんに話することはあまりないですね。少しはされていると思いますが。しかしこのようなことは、アメリカでは日常茶飯事です。なぜかと言いますと、アメリカでは仏教が広まっているといいながらも、仏教はまだまだマイノリティの宗教です。少数派の宗教です。キリスト教などアメリカで中心的な位置にある宗教に対して自分たちのメッセージを発信しようとする、一致団結して活動をしていかなければなりません。自分たちが言いたいことを言うためには仏教が一致団結しなければならないという状況があります。そのために町単位、州単位で、その地域に存在する仏教団体の人たちが集まって互いに関心を持っている事柄について話し合う会がたくさんつくられています。多分このような対話の中から本当のアメリカらしい仏教が生まれてくるのではないかと私は思っています。まだアメリカの仏教は、アメリカの宗教になったと言っても、まだアメリカ独自の仏教は生まれてきていません。まだ輸入されてきた仏教にア

## アメリカの仏教について

アメリカの人々も頼っている状況だと思っています。まだまだアメリカの仏教は輸入期の仏教です。しかしこういう形で、いろんな宗派、浄土系の仏教とかチベット仏教、韓国の禅宗、東南アジアやスリランカの上座部仏教が皆、集まってきて、それぞれの良いところを取り出して、新しいアメリカに合う仏教が生まれてくれば、そこで本当のアメリカの仏教が生まれてくるのではないかと思います。

## 結 び

仏教はアメリカの宗教になっていて、徐々にアメリカにはアメリカらしい仏教が生まれつつあると言いましたが、アジアから来たさまざまな仏教の伝統、それを学んだアメリカの人たちが集まって、本当に新しい仏教が生まれてくれば、もう一つアメリカの新しい宗教が増えて、本当にアメリカらしい仏教が出てくるのではないかと思います。そうやって本当の意味で仏教はインドから中国、中国から日本、日本からアメリカへ伝わっていったことになると思います。

参考文献

- Charles S. Prebish and Kenneth K. Tanaka eds., *The Faces of Buddhism in America* (Berkeley, University of California Press, 1998)
- Duncan Ryuken Williams and Christopher S. Queen eds., *American Buddhism: Methods and Finding in Recent Scholarship* (Surrey, Curzon, 1999)
- Charles S. Prebish, *Luminous Passage: The Practice and Study of Buddhism in America* (Berkeley, University of California, 1999)
- Richard Hugh Seager, *Buddhism in America* (New York, Columbia University Press, 2000)
- James Coleman, *The New Buddhism: The Western Transformation of an Ancient Tradition* (Oxford, Oxford University Press, 2001)
- \* \* \* \*
- Thomas A. Tweed, *The American Encounter with Buddhism, 1844-1912: Victorian Culture and the Limits of Dissent* (Bloomington, Indiana University Press, 1992)
- Paul David Numrich, *Old Wisdom in the New World: Americanization in Two Immigrant Theravada Buddhist Temples* (Knoxville, University of Tennessee Press, 1996)